

会 議 録

会議の名称		令和元年度(2019年度)第5回つくば市総合教育会議		
開催日時		令和元年(2019年)10月30日(水)13時から15時まで		
開催場所		つくば市役所5階 庁議室		
事務局(担当課)		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員		
	事務局	毛塚副市長 《総務部》藤後部長、吉沼次長 《総務課》中泉課長、中村課長補佐、澤頭係長、東泉主査、鈴木主任 《教育局》森田局長、大久保次長、中山次長 《教育総務課》貝塚課長、笹本課長補佐 《教育指導課》朝賀課長		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	7名
非公開の場合はその理由		—		
議題		教育大綱骨子案に関する協議		
会議次第	1	開会		
	2	市長挨拶		
	3	内容		
		教育大綱素案の協議		
	4	閉会		

＜審議内容＞

様式第1号

事務局：ただいまから、令和元年度第5回つくば市総合教育会議を開催いたします。本日は、お忙しいところ御出席いただき、誠にありがとうございます。

開催に当たり、市長の五十嵐から挨拶申し上げます。

市長：今日もよろしくお願ひします。ここまで総合教育会議を12回やってきました。教育大綱を作るためにこんなにやっているところはない気がします。今日は13回目で、パブコメ前に皆さんと顔を合わせて協議を行うのは本日が最後となり、12月から1月にパブコメで市民意見を募集し、意見を取りまとめて、今年度末頃の公表を予定しています。

ということで、今日はこちらのVer. 5の協議ですが、細かい表現等についてや方向性についてはこれまで何度も積み重ねてきているので、ここから急に真逆の方向に行くことはないと思いますが、どういう表現を入れていくかなどということをお話できればと思います。

私、修正入れられなかったところで、最後、「Oneteamとして」、これは事務局が入れてくれたのかな、ちょっと何か違うかもしれない。一旦全部は見たのですが、修正まではできなかつたのですが、他にも気になる表現やいろいろなものがあると思います。その辺の文言を修正、調整していくような会議にできればと思いますので、よろしくお願ひします。

事務局：本日の会議は、午後3時まで予定しております。今回は、教育大綱素案の協議を行います。

それでは、これからの議事進行は市長にお願ひいたします。

市長：教育大綱の構成について、まず、協議前に確認したいということです。前回は時間の都合で説明できませんでしたが、教育大綱全体の構成を資料として前回会議に配付しました。これまで皆さんと協議してきた大綱の中身の部分はいわゆる本文部分になり、その他に表紙や挨拶、どのように大綱を作成してきたかなど簡単な説明などを加えたものを教育大綱としたいと考えています。

様式第1号

パブコメを行う前に、構成についても修正がいくと思いますが、全体の構成については、基本的には私と事務局にお任せいただきたいと思いますと考えていますが、いかがでしょうか。

〔「いいです」と呼ぶ者あり〕

市長：これは体裁ということですか。幾つか見本を出してもらったのですが、例えば龍ヶ崎市でしたっけ、漫画っぽいのは。映画の「天気の子」みたいなイラストが描いてあるようなものとか、文字だけで硬派にやっているものとか、あとどこでしたっけ、横浜ですか。

事務局：横浜がそれでしたね。足立区が……。

市長：どういふのが皆さんのお好みかなというのは参考までに聞いておければと思いますが、漫画みたいなものもちょっと違うような気もしてはいるんですが。

教育長：市長のお好みで。

市長：中身の部分には。

教育長：私の推定ですが、首長が自ら一字一句書き下ろした教育大綱というのはほとんどないんじゃないかと思っていますから、そういうユニークな教育大綱を作ったわけですから、市長の好みで。

市長：わかりました。では、僕の全部手書きにしましょう。誰も読めません。ちょっとこれは皆さんまた相談させてください。

では、Ver. 5の協議、既にお送りして、ちょっと遅くなっていると思いますが、体裁、文言について、事務局で統一している部分もありますので、一旦事務局から説明をお願いします。

事務局：総務課の中泉でございます。それでは、事務局から説明をさせていただきます。着座にて失礼いたします。

前回、9月25日第4回の総合教育会議がございました。その後、教育長、教育委員の皆様からさまざまな御意見をいただきまして、事務局でまとめま

して全体を整理しております。本日は、特に事務局で表現や文言を統一した部分を中心に御説明させていただきます。

まず、資料1の1ページを御覧ください。

全体の構成ですが、6章立てとなっております。ローマ数字のⅠからⅥの後にタイトルが入る形となっております。各章のタイトルは、例えば第Ⅰ章では「つくばの教育が目指すもの」というように、文言の「何々のもの」などのように体言止めに統一をしております。以下、Ⅵ章までタイトルを読み上げます。

第Ⅱ章「つくばで目指す考え方の転換」、第Ⅲ章「つくばの教育の柱」、第Ⅳ章「つくばが目指す学びの場」、第Ⅴ章「つくばでの「学び」の特徴」、第Ⅵ章「つくばの「学び」の実現に向け、いま必要なこと」となっております。

次に、副題でございますが、各章のタイトルの後に、第Ⅰ章で申し上げますと、「つくばの教育は、一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位目標とする」というように、副題を用いて各章全体の表現をさせております。これまでⅡ章とⅣ章のみに副題がございましたが、今回、各章ごとに統一して記載をしております。また、この副題は、「何々する」など動詞で終わる通常の文章とし、文末に読点をつけております。

次に、各章の中の項目数でございますが、タイトル、副題に続く文章については、①、②と表現をしております。第Ⅰ章では②までですが、各章によって違います。多いところでは⑥までございます。

なお、この各項目の表記は、これまで①、②のほかに、中点（・）の表現も混在しておりましたので、今回は全て丸数字に統一をしております。

次に、注釈でございますが、一般的になじみのない用語、定義をはっきりさせておきたい用語については、本文中の用語に小さな括弧書きの数字をつけて、そのページの下部に注釈として用語の意味を記載しております。

次に、用語の統一でございますが、全体を通しまして異なる表現が何度か

出てくる言葉について、統一したものを御説明いたします。

まず、「一人ひとり」という言葉ですが、1 ページ目の副題中にも含まれております。これまで市民全体や子供全体、多くの人々を表現する言葉として、「一人ひとり」、「全ての市民」、「皆」、「みんな」という表現が混在してありまして、今回、「一人ひとり」という文言に統一をしております。

なお、公用語としては全て漢字で表現するところがございますが、これまで使われてきたとおり、漢字と平仮名を連続させて使用しております。

次に、「つくる」という言葉ですが、1 ページ、②の2行目の「より良い社会をつくる」の「つくる」という言葉ですが、漢字と平仮名が混在しておりましたので、表現の幅を広げるために平仮名で統一をしております。

それと、「はてなマーク」が幾つかついてございまして、ページが飛びますが、3 ページになります。①「自分自身は何者なのか」の後に記号の「はてなマーク」がついておりました。文章から疑問形だと読み取れるため、ここは削除をしております。そのページ以降も同様でございます。

次に、「何々など」という言葉ですが、同じく3 ページ及びそれ以降で、同様のものの羅列を避けるために「etc.」や平仮名での「〇〇など」、または漢字での「〇〇等」について、表現をやわらかく、またわかりやすくするために、平仮名での「〇〇など」に統一をしております。

最後に、注釈の追加でございます。Ver. 5 で新たに三つの注釈を追加しております。

まず、4 ページ目をごらんください。

③の3行目に「無謬」と6行目に「自己肯定感」、この二つを追加しております。

ページが飛びます。7 ページを御覧ください。

②の1行目から2行目の「自由裁量」についても、子供には余り聞き慣れない言葉のため注釈を追加しております。

様式第1号

以上、簡単でございますが、事務局からの説明となります。よろしく願
いいたします。

市長：各委員からいただいた意見を踏まえて体裁を整えてもらったのですが、
どうやって進めますか。1ページ目から見ていきますか、確認しながら。い
いですかね。多分それぐらいの時間はあると思いますので、ちょっと確認を
していきたいと思います。

では、僕からいいですか。前からちょっと気になっていたのですが、「社会
力」の部分です。「誰とでも良い関係をつくる力」という定義は、教育長に確
認してこれでOKだったということですが、「社会力とは、誰とでも良い関
係をつくる力、より良い社会をつくろうとする意欲、実行力のこと」という
説明があります。教育長がいつも言っているのは、「人と人がつながり社会
をつくる力」です。それだと抽象度が高過ぎるということなのかな。「誰とで
も良い関係」という言葉、ちょっと引っかかっています。

教育長：鈴木さんも何か引っかかると言って。

鈴木委員：引っかかります。

市長：鈴木さん、どの辺に引っかかっていますか。「社会力とは、誰とでも良い
関係をつくる力、より良い社会をつくろうとする意欲、実行力のこと」。

この社会力の定義は大事になってくる部分なので。

教育長：事務局から、鈴木委員が抵抗あると言っているが、どうしますかとい
う問い合わせがありまして、これは残しておいてくださいと私はお願いした
ところです。

市長：「誰とでも良い関係をつくる力」というのは、どういうふうに説明される
概念なんですかね。

教育長：最初から「あの人とは良い関係つくりたくない」などということの前
提にしたら、社会は成り立たないと思っているからです。

市長：そうすると、そこまではこの言葉からは読み切れない気がするので、要

するに、相手を排除したり、自分から関係を閉じたりしないというニュアンスですかね、今の話を聞いていると。それなら何となくわかる。

教育長：「頑張っても誰とも良い関係をつくれるわけがないだろう」ということを前提にはしないということです。最初から誰とでも良い関係をつくる努力はする、それだけの力をつけることが一番重要だと思っているので、私としては「誰とでも」というのを残しておきたいということです。そういう努力をしても、「あの人とは駄目だ」というような結果は伴うかもしれませんが、最初から「良い関係を作りたくない」と考えてはいけないと私は思っています。

市長：そうすると、誰とでも良い関係をつくろうとする意欲ということですね。

教育長：それをつければね。

市長：で、「より良い社会をつくる実行力」。「誰とでも良い関係をつくる力」とピシッと決められちゃうと、ちょっと…。

教育長：今の修正案でいいんじゃないですか。

市長：いや、提唱者ですから、そこはもちろん尊重しますが、「誰とでも良い関係をつくろうとする意欲」ぐらいの表現でいいですかね。

柳瀬委員：恐らくその「良い関係」というのが、どうしても前提として引っかかっちゃうと思うんですね。

市長：そうですね。

柳瀬委員：結果として「良い関係をつくるために」となると、すごく日和見的な感じがすると。なので、この「良い」を外した言葉にならないですかね。「誰とでも関係をつくろうとする力」、これじゃ駄目ですかね。

市長：何となくわかります。この「良い関係」もちょっと気になってはいました。要は、「コミュニケーションをとらずに、最初から排除せずに、それはコンフリクトを起こすかもしれないけれども、少なくとも対話をしていくような態度」ということを言いたいんですね、きっとこれは。誰とでも良い関係

をつくる力というのは。

だから、今、柳瀬さん話したような、「良い関係」というと本当に何だろうということがあるよね。何となく仲良くして、表向き仲良しさんみたいなのもちょっと含蓄してしまう。

柳瀬委員：それで、今、社会がこんなになっているのは無関心、いろいろな問題

に対して関心がなくなっているというのはすごく問題だと思うんですね。

そういう関係性をつくるというか、そこに人がいて、その人と関係をつくっていくという、ちょっと冒険的な意味があるのではないかなと思うんですね。

逆に、今、SNSなんかでもコミュニティは作ってこうとしているんだけど、仲の良いお友達だけというか、同じ考えの人たちが集まると。そういうことを打破していくための大事なポイントではないかなと思うので、この考え方はぜひ残して欲しいと思います。

市長：ちょっとこだわらしましょう、ここは。僕が議会でいつも聞いているのは、

「人と人がつながりより良い社会をつくる」。その辺は大きいからそんなに違和感はないんですよ。他者と関係性をどう構築するかということが大きいのだらうなと僕は常に思っていて、今の柳瀬さんの話もそういうことですね。だから、決めつけで排除するのではなくて、誰とでもというか、自分以外の存在ということでよければ「他者」という表現でもいいのかもしれないですが、他者とはちょっと違いますか。他者と関係性をつくる意欲を持ち、より良い社会をつくる力とか、そういうことで包摂されるのかどうか。

倉田委員：私思うんですが、他者を理解するために自ら環境をつくる、そういうことを言っているんじゃないかなと思うのですが。

教育長：いい関係というのは、当然他者を。

倉田委員：そうですね。良い関係というのは、積極的に自分から関わって、その人とのつながりをつくっていくという方向性なので、そのためには他者を理解しようとする努力というか、そういう姿勢が自分にあるかどうかだと思います。

うのですが。

教育長：私は、「社会力」という言葉を使う前は、「他者の喪失」という事態がどんどん進んでいるということを30年か40年ぐらい前から言い続けてきたので、「他者の喪失」という言葉だとマイナスを強調しているだけなので、これではだめだなということで、改めて「社会力を育てる」ということで言い方を変えて20年前から使ってきたので、これは「積極的に他者と関わり、他者を理解し、結果としては良い関係をつくる」ということを頑張っていきたいと、日本の社会に限らず、世界的にもガタガタになるのではないかとということで、ずっと私はこの言葉を使ってきたわけです。

さっきも言いましたが、「最初からあの人と仲良くなりたくない」というようなことを前提にしたら、今のようなことは進まないだろうということで、「誰とでも良い関係をつくるという努力はし続けましょう」ということで言い続けてきたということです。

もう一つ言えば、より良い関係、良い関係と同時に、より良いベターな社会をつくるということを同時並行的にやらないといけないと思いき、誰とでも良い関係をつくりながら、よりベターな、より良い社会をつくる力をつけることが、今、一番肝心なことじゃないかと思っているところです。これがなくなったら、AIが出回るようなことになるとますます社会がおかしくなると思っているので、これは何とか残しておきたいと私は考えています。

ただ、今、他者との関係をつくる力という代案がありましたが、私は初発の意識はそれと関係しています。日本人というのは、今までものすごく他者の存在を意識しながら生きてきた人たちだと思っています。

日本人は「他人」と書いて「たにん」なんて言っていないんだね。「ひと」というふうに呼び習わしてきているわけです。「ひとのふり見て我がふり直す」とか「ひとのふんどしで相撲とる」とか「ひと手を借りる」とか、とにかく「ひと」とつくのを辞書で引くと40通りぐらいあります、そういう言い方

が。全部中身は「他人」のこと。最近は、新聞記者でも「他人」と書いて「ひと」と読ませるようなことはしないで、「他」を抜いて単なる「人」というふうに表記する記事が圧倒的になっていますが、それだけ他者の存在を意識しなくなってきている。このことは、日本人の変化の中で一番大きな変化だと私は思っています。「他者があって、他の人があってこそ、私がある」というふうな意識、これはものすごく大事にしておかないといけないのかなど。

市長：今のいろいろなものを総合すると、「他者を積極的に理解し、関係性をつくり、より良い社会をつくる力」あたりはどうですか。

教育長：より詳しくなるということですね。

市長：詳しくなるけれども、要は、これを学校の先生が読んですんなりわかってもらわないといけないなと思うの。定義としては、もっと別な場所でこの社会力を解説する詳細なものは書いてもらいたいと思いますが。

教育長：今の趣旨で全然問題ないです。

市長：いいですか、修文。「他者を積極的に理解し、関係性をつくり、より良い社会をつくる力」。

教育長：いいんじゃないですか。

市長：では、今のを原案にして、微修正は後であるかもしれません。

教育長：それでもし詳しい説明あったら、何の異議もありません。

市長：それでは、もう1点気になるところ、「善き生の実現能力 (capability)」と言っていて、英語がここだけ入ってくる。これはいつも教育長が強調しているので、capability という表現はあったほうがいいのかなどとも思ったのですが、capability を「善き生の実現能力」と訳したのは教育長ということですね。capability は可能性とか将来性、素質という意味もあるから。

教育長：普通は、capability というのは潜在能力と訳されます。

市長：この capability の中に「善き」と入るか。「生の実現能力」まではぎりぎり、将来性という意味で考えれば入る。「善き生」という指向性が入ると、

ちょっと capability だけでは読み切らないなど、辞書的な定義になっちゃうのですが、それを「善き生の実現能力」でとめておけばいいのかなと思うんですが、ここに括弧して capability と書いてしまうことが、どうなのかなというのがちょっと気になります。

教育長：この「善き生」については、「良」という漢字を当てはめることもできるけれども、あえて私が善良の「善」を入れているのは、私の考え方としてはかなり深い意味がある。考えて入れているわけです。ざっくりと言えば、倫理的にも良いという意味を込めておきたいということで「善」という言葉を使い「善き生の実現能力」と。

これはもともとノーベル経済学賞を取ったインド出身の、今、ケンブリッジ大学の教授ですが。

市長：アマルティア・セン。

教育長：センさんが使っている言葉です。センさんの本を読んでいると、潜在能力などというよりも、センさんがその本の中で言わんとしていることが忠実に言葉で表されるんじゃないかということで、私は、あえてこういう言葉を使ってきているということがあります。

市長：そうすると、Ethical capability みたいなものですかね、もう少し説明的に書くとすれば。

教育長：capability を抜いてそのまま残したほうがいいんじゃないかという市長の提案であれば、なまじ capability なんて残さないほうがいいというふうには思います。

ちなみに、社会力というのは、社会性、ソーシャビリティという英語がありますが、それとは違うということで、これもあえて英語では、自分の論文中でも、ソーシャルコンピタンスという言葉を作って使ってきていますが、アメリカではソーシャルコンピタンスというのは正式に使われていることがわかりました。

しかし、ソーシャルコンピタンスはあえて入れていません。だから、同じように capability も抜くということであれば、それで皆さんが同意できるということであれば、それでいいと思っています。

市長：どうでしょうね。センが言ったような概念を入れ込むのであれば何かあってもいいような気もしているからちょっと迷ってはいるんですが、彼のものは、いろいろなものが「潜在能力」と訳されちゃっている気はしますけれども。

教育長：翻訳は、全部「潜在能力」で翻訳しています。ただ、それだとセンさんがその本で言っている意味が伝わらないんじゃないかと思っていることがあって、私は一步踏み込んで、センさんの考えていることを言葉にしたらこういうことになるんじゃないかということでこういう訳をつけているということです。

市長：多分センは、ソーシャルキャピタルとケイパビリティを結びつけて議論をしていると思うので、必然的にそのケイパビリティの方向性は社会に向いていると思うんですが、どうしようかな、英語の先生どうですか。

小野村委員：門脇先生のおっしゃることはもつともで、門脇先生の文献を読んでいる限りでは、capability という言葉を「潜在能力」として訳すことは非常によく理解できるんですけども、capability は capacity と ability の中間に位置する造語、複合語であって、この場合には、やはり ability というニュアンスも入ってまいりますので、使い方によってはちょっと違う側面がクローズアップされてしまうと考えます。もしここに capability という言葉を載せるのであれば、その後でもう少し詳しい説明を載せないと、その capability の両面性というのが曖昧になってしまうかなというような気がします。

教育長：抜いたほうがいいのかということですね。結論は。

小野村委員：結論としては、もし入れるのであればもうちょっと説明を加えな

様式第1号

いと。

教育長：長い説明は難しいですね。

市長：じゃ、この括弧書きを落としますか、そうしますかね。

教育長：はい。

市長：他にこのページでいかがですか。

小野村委員：まず、確認をしたいのですが、この1番は、主語が「つくばの教育は」となっていて、①は「つくる」とあります。②は「社会力を獲得する」とあって、②の主語は、「つくばの教育は獲得する」のではないので、これは「つくばの一人ひとりが獲得する」ということだと思います。①は、これを読むと「つくば市が」ということになると思うのですが、この後主語がよくわからないなと思って読んでいたのですが。

市長：明確にしましょう。この辺多分整理を最後してくれたので、整理し切っていないかもしれません。

1行目は、「つくばの教育は、一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位目標とする」、「つくばの教育は」というのは主語になり得るんですかね。

教育長：一番上に、タイトルが「つくばの教育が目指すもの」とあるから、ここは主語が特定されていると私は理解している。だとしたら、むしろ②のほうの最後、「善き生の実現能力と社会力を獲得する」となっていますが、ここはやはり教育がメインになっているわけですから、「育て」という2文字をここに入れて、「社会力を育て獲得する」というような表現にしないと、うまく伝わらないんじゃないかと思って、ここは「育て」という2文字を入れて欲しいと思っておりました。

市長：「つくばの教育は、その環境において一人ひとりが「善き生の実現能力」、社会力を育て」、「獲得する」の主語は。獲得させるということですか。

教育長：一人ひとりが獲得していくということで、これはこのままでいいんじゃないかなと。その「育て」ということがないと、一人ひとりが勝手に獲得し

様式第1号

ろと言っているようなことになるので、実現能力と同時に社会力を育てると
いう努力をして、その結果、みんながそういう力を獲得していくということ
になる、ならないといけないんじゃないかと。

市長：そうすると、ちょっと一文におさまらない感じがするね。②の「育てる」
と「獲得する」は並列にはならないと思うので、「一人ひとり」が主語になっ
ちゃっているんだけど、大丈夫ですか。

事務局：事務局からいいでしょうか。ごちゃごちゃに主語をつくってしまっ
ておりました。ここを修正して、例えば「一人ひとりの「善き生の実現能力」」
と、以下同じで、「社会力を育てる」というふうにそろえることもできるかと
思います。

市長：それだとすっきりしますね。「つくばの教育」を主語にして、「一人ひと
りの子を育てる」、主語はどちらかで、「獲得をする」という人目線でいくか
つくばの教育目線でいくかなんだけど、大きな柱としては、ここはつく
ばの教育が目指すものになっているので、「つくばの教育が」でいいのかも
しれないですけども、何か、小野村さん。

小野村委員：私も、ここは「つくばが」ということで、つくば市というか、地方
公共団体としての「つくば市」ということでもいいのかなという感じはして
いました。

ただし、その延長でさらに気になった点が、①では「つくる」、②で「育て
る」としますと、これは行政主導という意味合いが非常に強くなってしま
うんじゃないかなと。第2回で山本先生が提示してくれた資料、社会教育法第
3条を見ますと、ここには「国及び地方公共団体は」と始まって、「自ら実際
生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するように努めなけれ
ばならない」という言葉があります。醸成というと「行政側がつくってあげ
ます」という形ではなくて、「行政が働きかけることによって地域に自然発
酵が起こる」というか、そういう印象を受ける言葉ですので、ここは「つく

る」としてしまうよりは、「醸成」とかいう言葉、ちょっと難しい言葉もありますが、使ってはどうか。または「整えられるように努める」とか、そういった「つくる」と切ってしまうと、どうも押しつけ感があるなというような印象を得ました。

もう一つ、②について、これで大方いいと思うのですが、私、何度か申し上げているように、この後、いわゆるヒューマニズム、人間第一主義というのも私は変わってくるだろうというのは常に思っているわけですが、そこで「人と人とがつながり」というところをさらに加えて、「人と人、人と自然、人と歴史、文化、科学とのかかわり合いの中で」というように変えてはいかがかなと。さらに続けて、「真に豊かで持続可能な社会を築くための社会力と善き生を実現する力を養えるよう、一人ひとりの生涯を通じた学びを支える」というような表現ではどうかと、一つの試案として考えてまいりました。

市長：醸成ですね。難しいところなんですね。もちろんつくば市が強権的に上からやるわけではない話ですけども、醸成と言ってしまうと、ちょっと他力な感じというか、自分ごとになっていない感じの弱さも同時に感じていて、何となくそのときパッと浮かんだ言葉、「涵養」という言葉もありますが、「涵養する」とかだったらまだ主体性が読めるかなと感じたところですが、どうですかね。花開く環境を、これに関しては環境をつくると言っているの、個性をつくるのではなくて。だから、醸成させたり、涵養したりというのと、この①のところは読めなくもない気がします。

教育長：つくば市の新しい教育の意思を示す意味では、環境をつくるというのは全然問題はないと思います。そうなるのを待つなどというよりは、積極的につくっていきますよという意思表示のほうがいいんじゃないかと私は考えています。

小野村委員：そのあたりは本当に難しいところで、おっしゃることごもっともだと思いますが、今までどうしても教育行政において、今、問題となってい

る他人任せになりがちな風潮というものを考えると、最後の Oneteam というところも出ていましたが、そういったところではもう少し行政の働きかけと同時に、市民が主体性を持ってということも重要なのではないかなと思います。

であれば、例えば①は「つくる」としましても、②においては、例えば「支える」とか、そういう表現は用いてもいいのではないかなと思います。

市長：最後、「支える」というのは、「社会力を育むことを支える」ということですか。

小野村委員：「善き生を実現する社会力、そして善き生を実現する力を養えるよう、一人ひとりの生涯を通じた学びを支える」というようなことで。

市長：学びを支える、結構全面的に違う感じですね。あ、ホワイトボードがある。ちょっと今の話をしながら思ったのが、つくばの教育が主語になっているんですが、つくばの教育について我々は何を言っているかということ、多分、ここでは行政だけじゃないということではありますね。つくばの教育と言ったときの主語には、行政もいれば、教育局もいれば、保護者も、子供も、先生もみんないるということなのかなと思うと、受動形にならなくてもいいような気もしました。

「その環境において一人ひとりの善き生の実現能力と、人と人がつながり、自主的に持続可能なより良い社会をつくるための社会力を育てる、つくばの教育は。」と捉えることができる。

教育長：私は、このところは専門職者としての教師の新しい力かと思っているから、そういう力をつけることで、こういう社会力と善き生の実現能力を育てるということが、教師の新しい専門職者としての役割というふうに考えているから「育てる」という言い方、さっきも言いましたけれども、あえてそういう力をつけるということを残したほうがいいんじゃないかと。

「獲得する」ということだと、「ごく自然に一人ひとりそうなってください

よ」というような意味なので「育てる」という文言はぜひ残しておかないといけないんじゃないかなと私は考えています。

小野村委員：そこは、私は、育てるということはもちろん大事で、そこに私は「養う」という言葉を使いましたが、育てるといって他者からだけというようなイメージがありますので、養うといくと、周りから養うということもありますし、自己涵養というニュアンスも入るかと思しますので、それで私は「養う」という言葉を使いました。

一つ、確認ですが、1番は学校教育に限ったことではなくて。

市長：限っていないです。全体の話。

小野村委員：限らないですね。であれば、ここで社会教育という側面も若干は入れておかないといけないのではないかと思うのですが。

市長：最後を「社会力を養う」となると、意味としてはわかりますね。「育てる」よりも「育む」がいいのかなと私さっき思っていたのですが、「養う」という表現もあるかなと思いますね。「つくばの教育は、その環境において一人ひとりのケイパビリティと社会力を養う。」

教育長：ちょっと弱いと思う。

市長：育てる、育む。

教育長：「育む」のほうがちょっと弱いと思う、私の印象では。はっきりと「育てる」と。

市長：もっとつくばの教育を頑張ろうということですね。

教育長：そうそう。基本的には、新しい教育大綱というのは、どこかに書いていましたけれども、これまでの近代公教育制度から完全に抜け出すよという決意表明でもあるから、はっきりと。そういう方向だと、強く残しておくような文章のほうがいいんじゃないかと。

柳瀬委員：Iの①と②の関係ですが、これは並列の関係ではないですね。まず、①があって環境をつくる。「その環境において」と始まっているから、①

を受けて②があるのであって、①と②が独立にあるものではないと。そうすると、つくば市がやろうとしていることはこういう環境をつくっていくことなんですよと。

②は何かというと、社会力を獲得すべきだと言っているのか、そういう環境をつくれれば自然に社会力は育っていくんだよという事実を述べているのか。もちろんここで獲得していくべきだというふうに言うべきではないと思うので、私は、①と②をそういう関係で捉えると、社会力をそこで自然に獲得していくんだという表現のほうがいいんじゃないかと思います。

だから、社会力を行政が育てるんだというその気合とか目的意識は非常にわかりますが、それはそういう環境をつくることというふうに①で言っているので、行政が直接それを言うべきではないような気がします。

市長：それは①と②の主語を変えて解釈するということですね。

柳瀬委員：そうです。

市長：②は「一人ひとり」を主語にするということですね。

柳瀬委員：はい。「一人ひとりが」ということを言えば、それは「獲得する」でいいんじゃないかと。

市長：そうすると、別に二つに分けなくてもいいかもしれないですね。もし主語を変えるのであれば。

柳瀬委員：そうですね。

倉田委員：順位性があると思うんだよね。最初に行政でそういうふうにやって、それでこういうものを獲得していくと。

市長：①のほうはみんなでやると言っているんだよね。その中で、①と②の関係をどうするかと。

だから、つくばの教育というときに、ここに子供とかも入っているはずなんですよね、地域とか保護者とかも。そうしないと行政の専権になっちゃうと。「つくばの教育」で包含される概念は、ちょっと共通認識持っていていいです

か。つくばの教育というのはみんなでやる、みんなでやるということに対して疑義がある場合はまた別ですけれども。

柳瀬委員：この後ずっとつくばの、つくばのということで、つくば市が何をしようとしているのか、どういうことを大事にしようとしているかということと関係の上ですけれども、私の提案は、むしろここは「つくば」を外して、教育の目標は根本的にはこういうことでみんないいですよ、一致した意見ですよということを示すことが第一なんじゃないかと思います。その目標に対して、つくば市はどうするんだというふうにこれから展開していくべきだと思います。私の提案では、あえて教育の根本をどう考えるかということここで提示するというふうに思いました。

ここで「つくばの」と言うと、これは市民全体ということになるので、学校教育でどうしよう、社会教育どうしよう、生涯学習どうしようというのはこれから別にそれぞれ展開していかなきゃいけないだろうと。一人ひとりが幸せな人生を送るための教育なんだというのは、本当の普遍的な考え方だと思います。

倉田委員：今、柳瀬さんも言ったんですが、市長、私これ見たときには、順位性というのは、全体があって、個人に行って、それに向かっている順位性なのかなと私は思ったんですね、①、②は。

市長：いろいろな解釈がありますね。その整理をここでしようという話だと思うんですが、教育一般論でのステートメントにしてしまうのはちょっと弱い気もするんです。それは、例えば前段で挨拶とかあると思うので、そういうことは挨拶で入れてもいいのかなと思うんです。つくばの教育大綱では、やはりつくばの教育の話をしたほうがいいかなという感じはなんとなく思っています。

その上で、今のいろいろな議論を総合すると……何か言いかけましたね、どうぞ。

教育長：やはりここは「つくばの」というのを残しておかないとだめじゃないかというのが私の考え方です。「善き生の実現能力」にしても、「社会力」にしてもまだまだ、私はずっと言ってきたわけだけれども、世界のあしたが見えるまちであれば、つくばは世界のあしたの教育のトップランナーになるべきだとずっと言ってきたので、他の市町村ではやってないことをあえてつくばはやりますよという強い表現をしておかないと、一般的な普遍的なことでは主張がなくなってしまう。やはりつくば市が先頭に立ってやってくんだという意思表示をちゃんと残すような表現でないといけないんじゃないかなと思いますね。

市長：仮の案として、つくばの教育というのを、僕らはここで地域全体というふうに読みたいわけですね。みんなでやるということを読むんだとすれば、地域全体がその環境において一人ひとりのケイパビリティと社会力を育てるとなれば、そんなに戦前軍国主義みたいな話にならない読み方のような気がしますけれども、どうですか、柳瀬さん

柳瀬委員：そうですね。地域……私は全体としてちょっと気になるのは、ほとんど学校教育のほうに話が展開しているので、教育から学びへと割には、またずっと教育の話になると。ですから、地域よりは生涯学習のほうに縦に展開していく方法もあるのかなと思っているんですよね。それで今みたいなことを考えたんですが、その辺はどうでしょうか。

市長：生涯学習は、その山本先生のような話をしていると、僕は、あそこで議論されていたようなことは、この②は読めるんじゃないかなという感覚は持ってはいました。確かに横ばかり意識されているところはあるかもしれないですが、より良い社会をつくるための社会力というのは、子供に求めていると同じぐらいに地域全体に求めている、地域の人たちにも生涯学習を通じて求めているものなのかなということを考えていましたので、それは縦の連続性を排しているものでもないという感じはしますけれども、ここからどう読め

様式第1号

るか。

鈴木さん、静かですけれども。

鈴木委員：終わるのかなと思って。

市長：大事なんでね。

鈴木委員：大事なんですよね。

市長：ここが一番大事で、あとは細かい話なので。

鈴木委員：私は、②はそのままの文章で、①、②というのはなくしてしまえばいいのかなと思っています。①、②というふうに書くと並列のように思われるので。

市長：それはあるなと思ったんですが、それをやると一文が長くて大変かなという感じがしたんですね。先生たちが読んだり、子供が読むときに。この2文というのは、結構難解な2文になっちゃうかなということを懸念しました。だから、なければ、例えば①も②もなくて、つくばの教育は最上位目標とするとか言わなくても、別に①と②で話としては納まるなとは思っていますが。

鈴木委員：つくばの教育というものを、子供たちのことに限らず、市民全体で支えていくというふうを考えることさえわかれば、①、②はこのままで読めるかなと私は思います。

市長：文として難しい気がするんだけど、どうなんだろう。

鈴木委員：難しいですか。

市長：「つくばの教育が目指すもの」とあって、「一人ひとりが幸せな人生を送るために、違い受容されそれぞれが持っている多様で豊かな個性が花開く環境をつくる」、「その環境において一人ひとりの「善き生の実現能力」と、人と人がつながり、自主的に持続可能なより良い社会をつくるための社会力を獲得する」、一人ひとりが獲得するとあるわけですね。それがつくばの教育が目指すものというビジョンで言っても、文意としては十分成立はしています。言葉として十分きれいにまとまっていますし、矛盾もないと思いますが、

様式第1号

ここで長い文章を読まされた人が、拒絶反応を起こさなければいいなという感じだけ、ちょっと懸念しますけれども。

教育長：私は、①、②の分離案賛成ですね。一緒くたにすると何が何だかわからなくなってくる。

市長：では、一旦いろいろ議論をいただいたことを踏まえた上で、分離にはして、主語を統一させて、地域がという読み方をして、その環境において一人ひとり、育てるといふ、ちょっと重たい要素も懸念される御意見もあります。と、いったあたりで柳瀬さんどうでしょう、大丈夫ですか。

柳瀬委員：大丈夫ですよ。

市長：学校教育という感じは、僕は余りここは持っていなかったんですが。

柳瀬委員：学校教育は、これから後のほうがそうなるので。

市長：確かに、確かに。

柳瀬委員：最初の入り口が、非常に大事な大きな入り方をしているので、それに見合った後ろがついてくるかなという、ちょっと心配ですね。

市長：わかりました。そこは大綱の次の計画の中で具体的にやっていくので、一旦それでよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：ありがとうございました。

2ページ目、つくばが目指す考え方、この辺も最後にまとめてくれて、この1行目は今回事務局が考えてくれたかと思いますが、「近代公教育が抱えてきた問題や矛盾に対する転換を宣言する」と書いてありますが、「宣言」という言葉を使うんだったら冒頭なのかなという感じがしていて、ここは「転換を目指す」でいいんじゃないかという感じもしますが、この辺の表現からちょっと。

宣言しちゃいますか。宣言はやはり宣言なので、行為として儀礼的なことも含めて意味があることだと思うので、ここは、つくばで目指す考え方の転

様式第1号

換なので、「転換をする」とか「転換を目指す」のほうがより自然に進む気がしますが。

柳瀬委員：そう思います。

市長：よろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：「転換を目指す」ですか、「転換をする」ですか。

教育長：目指す。

市長：「目指す」でいいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：わかりました。では、「目指す」でお願いします。

その他のところあれば、このページで。

何でペットボトルがあるんだ、これ。つくば市役所の会議はペットボトル配布をしないはずになったんだけどな。通達行ってないですか。

〔「在庫処理」と呼ぶ者あり〕

市長：在庫処理ということなので、皆さん飲んでください。それはしようがない。捨てちゃもったいないから。飲みましょうよ。

他の部分いいですか。「①「教え」から「学び」への転換」、一斉・一方向教育から個別・双方向の学びへ、②「管理」から「自己決定」への転換、受動から能動へ、③「認知能力偏重」から「非認知能力の再認識」への転換、偏差値偏重から全人格教育へ。

ちょっと気になったのが、この「偏差値偏重」というあたりがちょっと安い表現になっちゃっているなという感じはしているんですね。「偏差値」などという言葉在这里で使う必要があるかどうか。偏差値という言葉、余り使わないよね。

小野村委員：私もそこをちょっと感じておりまして、例えば一つの案として、私が考えていますのは、「机上での知識の積み上げから」としてはどうか

様式第1号

と思いました。

教育長：机上というのは机の上。

小野村委員：はい。

教育長：わかるかな。

小野村委員：漢字にすればわかるんじゃないかな。

市長：では、一旦「偏差値」やめますね。偏差値をやめて何を偏重しているんだという話ですね。「学力」と言っちゃうとちょっと違うんですね。学力は普通に学力でいい話なので。

倉田委員：知識、理解とかそっちのほう、その点数ということですか。

教育長：つまりは点数。

市長：点数……でも、現実問題として、点数は偏重されているというか、それで受験も行われるわけだし。点数というのもちょうと、ここになじむ表現どうなんでしょうか。

柳瀬委員：認知能力を置きかえるわけですよ、ここで。認知能力を偏重するとか偏重しないという問題なのか、ちょっと私はよく理解できないですけども。

市長：その部分は大事な考えで、ここはすごい悩んだんですね。認知能力を否定するものではないんですよ。認知能力はあっていいので。ただ、「そればかりになってはまずいよね」ということを表現したいので、非常にここの表現は悩みましたね。認知能力偏重じゃない言葉でもいいんです。

柳瀬委員：置きかえて、全人格教育へとすると、全人格教育と対比できる言葉があればいいわけですよ。何でしょうかね。

市長：細分化されているような、細分化された知識みたいな、そういう概念ですね、きっと。そういう意味では、机上での知識の積み上げというのは確かにあるけれども、机上での知識の積み上げというと、ちょっと刺激的というか、知識偏重か……。

様式第1号

倉田委員：知識理解偏重……。

市長：悪いことじゃないんですよね。

柳瀬委員：知識あるのは悪いことではないですね。

市長：決して悪いことではないのだが。

倉田委員：それだけではないというのをどういうふうに言うか。

市長：僕もともと書いていたのは、「認知能力重視から非認知能力も重視する
転換」みたいな、「も」みたいにしたんですけども。

教育長：そのほうが自然じゃないですか、今のほうが。「非認知能力の再認識」
というとなますますわからなくなる。今、市長が言った表現のほうがすんなり
来るなと思って聞いていました。

市長：一時期そんな表現をしていたと思うんですよ。この辺うろうろ悩んだと
ころで。

事務局：前回のやつです。

市長：「認知能力偏重から非認知能力も重視への転換」。

事務局：それだと日本語が変なんですわね。

市長：そうなんですわね。「再認識」をやめて「教育」とか入れたりしていたら、
どうしても日本語がつくり切れなかったので、

柳瀬委員：その言葉合わせで、「への転換」というのを入れているから、ただ転
換ではないので、「非認知能力の再認識」という言葉だけでも、僕はいいかな
と思いますよ。転換というと、まるっきり変えてしまうみたいな感じだけ
れども、そうではない考えだから。

市長：じゃ、全部「転換」落としますか、そろっていないとちょっと気持ち悪い
ので。「教え」から「学び」へ、「管理」から「自己決定」へ、「認知能力偏
重」から「非認知能力も重視」へ……。

柳瀬委員：再認識でもいいと思いますけど。転換という言葉はちょっとやは
り。

倉田委員：入れなくていいかも。

教育長：「再認識へ」で。

市長：だったら、僕は上も落としたいな。語尾並んでいないのは気持ち悪くてしょうがない。

柳瀬委員：「転換」なくしたほうがいいんじゃないの。

市長：では、「転換」なくしましょう。「教え」から「学び」へ、「管理」から「自己決定」へ、「認知能力偏重」から「非認知能力の再認識」へ、「非認知能力の再認識」でわかりますかね、みんな。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：では、これで置きます。これで置いた上で、何から全人格教育へ。

小野村委員：「転換」という言葉は私も強いなと思っていたんですが、「転換」という言葉が削れれば、「知識偏重から」ということで十分通じるような気がします。

市長：「知識」でしょうね、ここで書くとしたら。

倉田委員：「全人格教育へ」だけでいいんじゃないの。

市長：いや、ここ変わっているのを具体的に説明をしている流れなので。

柳瀬委員：「知識偏重」でいいんじゃないですかね。

市長：知識偏重というのは、問題として確かに起こっていることではありますよね。

では、いいでしょうか。「転換」を全部落として、「知識偏重から全人格教育へ」、これは納まっていますね。

小野村委員：①の「教え」から「学び」へといったときに、②を見ますと、「受動から能動へ」といったところが重複しているというような印象を受けたのですが、いかがでしょうか。

市長：ここで僕がちょっと言いたかったのは、「管理」から「自己決定」へというのは、もうちょっと前のバージョンだと、もっといろいろ書いていた気が

様式第1号

したんだけど、何と書いていたかな、同じではないと思うんですね。柳瀬さんの御指摘のとおり、ここは学校教育の枠にはまっちゃっている話ですが、①は何となく授業の枠組みで見えて、②は学校生活全体みたいな、中学生とタウンミーティングやっても、先生に押しつけられるのはおもしろくないとか、自分たちでつくるほうが楽しいとか、そういう議論も結構していたのを受けているので、もう少し広いことが②で言えているような気はしているんです。

小野村委員：そうすると、後半に出てまいります挑戦であるとか、クリティカルな姿勢であるとか、そういった言葉をもう少し補っていただくと、その違いがクリアになるのかな。

市長：なるほど、どこまで書き込みますかね。

教育長：今、指摘したことは後にまた出てくるから、ここはシンプルにこれでもいいんじゃないかな、受動から能動へと。ここでグダグダ入れるよりは、ここで「受動から能動へ」と言い切ったほうがいいんじゃないかなと思います。

市長：どうですか、小野村さん。

小野村委員：いいと思います。

市長：いいですか。では、そう理解してください。

3ページ目、何かありますか。

教育長：まず、①のところの3行目、「他者との比較」、細かいことですが、この「との」の「の」は取ったほうがわかりやすいのではないか、これが一つ。

②のほうは、個性、性別、障害、国籍と並んでいますけれども、もう一つ、さまざまな差別とかそのネタになっているのは文化の違い、宗教の違いがあるので、「文化、宗教」という2文字を足しておいたほうがいいんじゃないかなと、これが一案です。

それから、③の一番最後の行ですが、「社会をつくっていくための必要な学び」と書いてありますね。ここにも「より良い」と、念のため、よりベター

様式第1号

などという意味の「より良い社会をつくっていく」というふうに補足していったらどうかということで、私からこのページはそれだけです。

市長：①「他者と比較した評価ではない」ですね。

教育長：そのとおりです。

市長：文化と宗教はどこに入れますか。個性、性別、障害、国籍、経済状態がありますが、国籍の後に「文化、宗教」、「文化、国籍、宗教」、「宗教、国籍……」、何か国の法律とかでよくある順番はあるのかな。

教育長：「国籍、文化、宗教」と並べてもいいんじゃないかな。国籍があるんだったら文化の違い、宗教の違いも入れておいたほうがいいんじゃないのかなと思って、つけ足しですね。

市長：国籍の後に「文化、宗教」、次が「経済状態」なので「文化」のほうが経済状態にはつながりやすいかもしれない。「国籍、宗教、文化」でいいですか。

教育長：順番にはこだわらない。

柳瀬委員：「文化、宗教」はやはり国籍の後のほうがいいと思います。だんだん広がっていくので。

市長：どちらがいいですか、文化と宗教はどちらが先ですか。

柳瀬委員：難しいですね。

教育長：順番にこだわるとしたら「宗教、文化」のほうが、文化のほうが広がり大きいと思う。

柳瀬委員：そうですね。それで「経済状態」は削ったほうがいいと思います。

市長：「経済状態」削る。

柳瀬委員：どうでしょうか。

市長：ちょっと違いますよね、確かに。経済状態というと、ここだけちょっと違うかもしれませんね。我々も貧困とかいろいろやっている中で、どうしてもこういうことになってしまうのかもしれないですけども。

様式第1号

柳瀬委員：経済状態というと、絶対貧困というのを認めるか、認めないかという話になるので、相対的なものを考えると、入れるのは難しいなと思いますね。「宗教、文化」まででとめておいたほうがいいと思います。

市長：「経済状態などの全ての違いに目を向ける」、どうですか、「経済状態」を落とすことについて。「経済状態」でない言葉としてこれを表現する何か言葉は……。

ここは、経済状態の話とはちょっと違う話なんですね。経済状態、強みとか弱みの話ではないんだよな、ここで言いたいことは、落とすほうが自然な気がしますね、確かに。

柳瀬委員：違うレベルに見えますよね。

市長：そうですね。落としでしようね。

③の最後、「より良い社会をつくっていくために」、「良い」は漢字ですか。

教育長：「良」でいいんじゃないですか。前は「良」を使っていますから。

市長：より良い社会、いいですか、入れる形で。ここにはそんなに議論はないかもかもしれません。

では、4ページ目、ここも学校の話ですよ。どうしてもというところはある。このページで何か御意見あれば。

一個あった。②の「大人はこどもの目線に立ち戻り、こどもの発想を認め、大事にする」、この表現、せめて「大切にする」ぐらいにしたいな。「大事」というのがちょっと気になること。「大人がこどもの目線に立ち戻り」ということをどう表現として受け入れる、「大人がこどもの目線に立ち戻り」、これ柳瀬さんが出してくれた意見ですかね。事務局、これコメントが入っていたんですけど。柳瀬さん。

柳瀬委員：忘れた。何が言いたいかですよ。

教育長：「目線に立ち」だけでいいんじゃないの、「戻る」は抜いて。

様式第1号

柳瀬委員：そうですね。戻らなくてもいいですね。

市長：では、「大人がこどもの目線に立ち、こどもの発想を認め、大切にする」、いいですか。

倉田委員：最後の文言ですが、「主体的に問題に取り組むことを常に期待し続ける」、他力的のような気がして、「期待し支援する」とか、その辺はどうなんでしょうかね。

柳瀬委員：「常に」もくどいですよ。

市長：取り組むことを……。

柳瀬委員：「期待する」でいいんじゃないですかね。

倉田委員：「期待し、支援する」とか、「期待し」でも、「期待する」……。

市長：「期待する」というのはちょっとあれだよ。

倉田委員：他力本願みたいな感じで。

市長：取り組むことを支援する。

倉田委員：はい。

小野村委員：先回もこういう話が出たと思うんですが、③の中ごろに、「大人も積極的に挑戦し間違ふことから学ぶ」とありますが、間違ふというと、先に間違いが出てきちゃうような感じがしますので、ここはそのまま、その下に「挑戦や失敗を繰り返しながら」という表現も出ていますので、ここは「大人も積極的に挑戦することから考え学ぶ」とするか、または、間違ふということではなくて、先回も出ていた「試行錯誤」とかえるか、どちらかのほうがいいのではないかなと思いました。

市長：挑戦することから学ぶということですね。僕、結構こここだわっていて、特に先生たちというのは、この無謬性からなかなか逃れられないのではないかなと思っているんですね。だから、ここで、「安心して間違ってください」と言うことが、先生たちへのエールになるのではないかなと思っています。はい。

様式第1号

教育長：間違ってもいいんじゃないのかと思うけれども。

小野村委員：そういうことであれば、ここはそのままでもいいと私は思います。

おっしゃることはよくわかるので。

市長：できれば残したい。気持ちとしては、ここは残したいなと思いますが、皆さんよろしければ。

倉田委員：注釈が入っているから、残してもいいんじゃないですか。

市長：いいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：それをお願いします。

鈴木委員：細かいことですが、1行目の「社会全体でこどもを支え、育てる場所」というのは、これは「支え、育てる」というふうにかかっているんですか、場所に。

市長：「保護者・学校・地域・行政が協力し、社会全体でこどもを支え、育てる場所をつくる」。

鈴木委員：「支え」で切れるんですか。

市長：どこで切れるだろう。この1行目は、基本的に今回入れてもらった感じなので、社会全体で……。

教育長：一応切っておいたほうがいいんじゃないの、わかりやすいんじゃないの。「支え、育てる場所」。

市長：鈴木さんの問題意識としては。

鈴木委員：私は、「支え育てる場所」というふうなのかなと思って読んだんですが。

市長：「支え育てる場所をつくる」ということですね。一言で言っちゃうということね。

鈴木委員：意味合いが、そこで切れているのかどうかわからなかったんです。

教育長：私は、支えて、育てるというふうな意味で、このままでもいいんじゃない

様式第1号

いかと思います。

市長：学びの場は、みんなが協力して「社会全体でこどもを支え、育てる場所」なのか、「支え育てる場所」なのかということですね。

鈴木委員：そうなんです。

市長：鈴木さんは、「支え育てる場所」ということでしょうか。

鈴木委員：だと思ったんです。

市長：そっちのほうが僕は明確な気がします。「育てる場所」というと、育ててやるみたいになっちゃう感じも、やや印象としてはあるかもしれない。どうでしょう。

教育長：私は、「支えて」、「て」も入れるぐらい、支えるのと育てるのとは別枠に考えたいということです。結果としてはそんなに問題ないと思うけれども。

市長：社会全体でこどもを支え……。

教育長：「て、育てる」というのが、私は。「支えて、育てる」。

鈴木委員：意味がちょっと変わってくる。

市長：どちらになっても、そこまで大変な違いは生まれないかもしれないですけどね。社会全体で子供を支えるという概念をどこまで大事にするか、それとも場所の話をするかということだと思うんですが、学びの場なので。

学校は、あくまでも……この一文、ちょっと違和感はありますね。

柳瀬委員：「社会全体でこどもを支える」というのは、これは制度とかそういう感じがするんですよね。育てる場所というのはすごく具体的なイメージがある、学校という感じがするんですけども、その学校も経済的に支えているのはみんなの税金だよねみたいな、別のことを一つに言おうとしているような感じがしてならないですね。なので、「支え、育てる場所」で、私はこのままでいいかなと思います。

市長：社会全体で……学びの場の話をしているんですね。学びの場が育てる場

所になっちゃっているのが、ちょっと僕は違和感を感じていて。

柳瀬委員：それはそうですね。

市長：「社会全体でこどもの学ぶ場をつくる」とか、だめ。この表現に違和感があるのは、箱に閉じ込めちゃっているような感じがして、そうじゃなくて、我々は学びの場としての話をしているので、社会全体でこども……。

倉田委員：育てる場所は、学校だけではなくて幅広くあると……。

市長：「こどもの学びの場をつくる」ぐらいでいい気がするんですが。

小野村委員：よく読んでみると、今、市長がおっしゃったように、タイトルが学びの場となっていて、学ぶのは子供たちですよ。

市長：本当はみんなですけれども、その辺がちょっと悩ましいところですけども。

小野村委員：学ぶ側と、育てるとなると子供に限定して考えたほうがわかりやすいので、育てるのは、子供ではなくて大人が主語になりますね。その辺がちょっと今聞いていて矛盾しているのかなと思ったんですが、このタイトルとここの矛盾を考慮するのであれば、「社会全体でこどもの育ちを支える場所をつくる」というふうにすると、タイトルとの矛盾はなくなるのかなと思ったのですが。

教育長：なかなかいいじゃないですか。

市長：育ちを支える場所……。

柳瀬委員：「育てる」じゃなくて「育ちを」、主体を子供にする。

教育長：子供がみずから育っていくことを支える場所ということですね。

市長：であれば、そうしましょうか。「こどもの育ちを支える場所をつくる」、今の「学び」というよりは「育ち」という形ですね。

いいでしょうか、このページ。

教育長：どうでもいいけれども感じたことが、①の2行目にある「事」は、平仮名にしておいたほうがいいんじゃないかな。私は、この「事」は自分では使わ

様式第1号

ないものですから、漢字としては。①の2行目にある「日常生活の中で感じた事」というのが漢字を使っているでしょう。

市長：平仮名ですね。

教育長：私のは漢字になっている、何でかな。

事務局：メールで送っていたのが、ちょっとそこだけ。直したものを今日配りました。

教育長：もう直っているんだね。

市長：他は違わないよね、みんなが見ているもの。大丈夫ですか。

事務局：はい。

市長：5ページ目、ここも1行目が気になって、「つくばならではの教育を徹底して実行する」というのが、ちょっと頑張り過ぎている感じがするので、何かいい表現ありますか。

つくばならではの教育というのも、ちょっとまた難しいんだよな。ここは学びの特徴だからね。何かありませんか、表現。

教育長：「徹底して」というのがきついとしたり、重いとしたり、「着実に」とか、そういう言葉もありますね。「粛々と」とか。

市長：「粛々と」は何かちょっと。

教育長：だとしたら、今言った「着実に」。

市長：余り意味のある一文になっていないんですね、つくばならではの教育を実行するというのは。そこに何らかの意味を持たせないと、あんまりこの一文の意味がない。

教育長：ニュートラルに「着実に」というのはどうですか。

市長：いや、そうなんですけれども、じゃ、そこで持ってきますか。「つくばならではの教育を着実に実行する」、つくばでの学びの特徴を言っているんですが、学びの特徴がここに一言も書かれていないんですよ。だから、何だろうな、やっぱりちょっと違うんだよな。つくばでの学びの特徴……ゼロベ

様式第1号

スで、ちょっと何かないですかね、つくばでの学びの特徴で入れる一文として。学びの特徴を一言で表現してほしいんです、この①から⑥までを。

事務局：議論も大分したんですが、大きな2番で近代公教育からの転換の話をしているので、つくばらしさは、「近代公教育的なものを転換するため」みたいなものを冒頭に入れると、これを包含したような指向性は出るのかなと思いました。

市長：「近代公教育の課題から転換するために、つくばならではの教育を着実に実行する」みたいなこと。

事務局：もしくは「転換を具体化するため、以下の点を重視する」とか。

市長：そういうほうがいいね。それいいね。「近代公教育からの転換を具体化するために、以下の……」、ほかのところでは以下とか言っていないのかな。

教育長：「ための」というのを入れたら。「転換するためのつくばならではの教育を着実に実行する」。

市長：そうでしょうか。「近代公教育から転換するためのつくばならではの」、の、のになっちゃいますね。

小野村委員：今の副市長のおっしゃることで私も賛成です。①から⑤までを通して、最終的に⑥はまた少し整理の違う目標になると思いますし、日ごろから市長が強調されていらっしゃることでもあるので、今、副市長が言われたことに加えて、それを通して持続可能な社会の実現を目指した教育とか、ここに何か「持続可能な社会」というキーワードを加えてはどうかなと思います。

市長：だんだん意味が出てきました。「近代公教育から転換し、持続可能な社会を目指すための教育を着実に実行する」とかですか。

小野村委員：いいと思います。

市長：いちいち「つくばならではの」と言わなくても、つくばならではのとか、特徴あるというのはちょっと語るに落ちる感じがするので、「近代公教育から

転換し、持続可能な社会を目指すための教育を着実に実行する」ぐらいだったらいいでしょうかね。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：ありがとうございました。

いいですか、次のページも含めて。ありますか。

鈴木委員：6ページ目の④のところの2番目の文章が、ちょっと長くて、いまいち言っていることがわからないのですが、実体験を大切にする学びの中にこの「試行錯誤」というワードが入ってくるんですかね。私は、この「試行錯誤」ということは大事なワードとして入れたい文言ですが、4の③のあたりに入れてもいいと思うし、どうしてここなのかなというのがちょっとわからないところなんです、ここに入れるとしても、この2番目の部分もう少し整理できないかなと思います。

市長：改めて見直しているんですが、長いですね。そもそもこの1番目、「つくばの大きな特徴である」とか書く必要あるのか。つくばの特徴、現状を表現したりしているということですね。

「あらゆる機会で実物や実体験で学ぶことにより」、この「蓄積された高度な科学技術などを実体験できることはつくばの大きな特徴である」というのを削除して、「科学技術など」の後に「あらゆる機会を実物や実体験を通して学ぶことにより、対話的・協働的な学びの基礎をつくる」で切っちゃう。で、「学びの中での試行錯誤を促進することで、こどもの好奇心を刺激し、こどもが持っている興味を掘り下げ、創造性と革新性の獲得を目指す」となったら、どうですか。

小野村委員：今の市長のおっしゃるとおりでいいと思います。そのあらゆる機会というところを、「恵まれた環境を生かし」とでもしたらいかがでしょうか。

市長：「科学技術など恵まれた環境を生かし、実物や」ということですか。

様式第1号

小野村委員：はい、1行目をカットした分、「あらゆる機会に」というところを「恵まれた環境を生かし、実物や実体験を通して」としたらいかがでしょうか。

市長：それは残してもいいですね。「恵まれた環境を生かし、実物や実体験を通して学ぶことにより」ですね。で、「基礎をつくる」まで。

教育長：「つくばの」という4文字を入れたら。

小野村委員：入れてもいいと思います。

市長：「——など、つくばの恵まれた環境を生かし、実物や実体験を通して学ぶことにより」、で、「基礎をつくる。」、どうでしょうか。

教育長：細かいことだけれども、④の下から2行目、「試行錯誤を促進する」と書いてあるけれども、「促す」ということで。

市長：そうですね。そうしましょう。

「こどもが持っている興味を掘り下げ」だけでいいのかな。広げなくていいんですかね。難しいけれども、薄く広げてもしようがないとも言えるし。いいのかな、掘り下げればいいのか。

倉田委員：掘り下げれば、創造性とかそういうことも……。

教育長：「掘り下げ」の前に「広げて」を入れることも可能じゃないかな。

市長：「興味を広げ、掘り下げ」。

教育長：範囲を広げ、深まるという意味になるんじゃないかな。

市長：「こどもの持っている興味を広げ、掘り下げ」、ちょっと後であれだったら、それで行きましようか。いいでしょうか。

では、最後の6番、1行目はどうしましようかね。ちょっとゼロベースでここも一回位置づけしてもらって。

教育長：Oneteamって、これ日本のラグビーチームの……。

市長：流行に乗ってみた感じ。文科省が言っている「チーム学校」という表現が僕はすごく嫌いで、何かわざとらしい感じがしちゃうんだよね。「つくばの

「学び」実現に向け、いま必要なこと」、このタイトルはどうか。

倉田委員：③ですが、ここの中の4行目に、「中心部や沿線開発地区、周辺地区ではそれぞれ」、それ必要ないかなと思う。これ「各地」でいいかなと。なぜかという、6ページの④では「各地の」ということで、「各地の多様な文化と質の高い芸術」というのを取り上げているので、ここを何で具体的にこういう言葉にしたのか、必要ないかな。だから、「各地のそれぞれの人材・環境・資源・歴史・文化などの特徴を生かした学びを進める」ということでいいのかな。「緩やかにつながりながらお互いを許容し」、ここにかけて言っているのであれば、それでいいのかなと思うんですが。

市長：そうですね。これは多分、周辺地区を大事にするというところからあえて特出ししたような記憶がありますけれども、よろしければ「各地区」のほうが自然かなとは思いますが。ただ、③に入ってしまうと、「保護者・地域・学校・行政がそれぞれを許容した」というのが、日本語としておかしいと思うんです。ここもともと「不完全さ」とか書いてあったんですね。「それぞれを許容する」というのは、余り表現として成立していない気がする。

「それぞれの不完全さを許容する」ならわかるんですが、この「不完全さ」を落とした意図はあるんでしたっけ。

事務局：鈴木委員から。

鈴木委員：私が言ったのかな。「不完全」も「許容」も入れる必要があるのかなと思いました。それぞれに落ち度があるみたいな表現を入れなくてもいいのかなと思って、「不完全さ」を気になるというふうに指摘しました。

市長：落としちゃうなら落としちゃっても成立はしますよね。「緩やかにつながりながら補完し、支え合う」というので、その「不完全さ」の部分は変えたんだけど、あえてこれどういう議論の中で変えていったか記憶がないんだけど、学校に完璧を求められても困るということは言っておいたほうがいいんじゃないかなと思ってはいて、そのメッセージとして僕はここに

様式第1号

いては、不完全だとか、寛容とか、そういう概念が何かあったほうがいいんじゃないかなとは思っておりました。

鈴木委員：であれば、補完くらいでいいんじゃないですかね。

市長：読めますけどね。

小野村委員：先ほどの「間違い」という表現と同じで、このままで「それぞれを許容した」というのはおかしいと思いますけれども、市長の今のお話を伺えば、みんな間違っって不完全なものなんだという前提で、それを恐れずということを強調されるのであれば、逆に私は、ここはそれぞれの不完全さを許容し、許容しながらも穏やかなつながりを目指していくということで、残してもいいのかなと、そこを逆にクローズアップするのであれば、と思います。

市長：いいですかね、残しても。今後のために残しておきたいというか、みんな不完全だということだと思うんですよ。そこはすごい大事で、さっきの無謬性の話とも同じで、これは逆に保護者、地域向けのメッセージとしてあるんじゃないかなと。そういう社会になってほしいなと思うんです。

もし戻してもよければ、「行政がそれぞれの不完全さを」、ちょっと堅い文章なんだけれども、「——を許容し」、ここは名詞でとまっているね、「実現に向け、いま必要なこと」。「不完全さを許容した……」、前が「不完全さを補完し合う穏やかなつながり」とかだったら、「許容」という言葉はなくてもいいよね。

倉田委員：私が思うには、それぞれのよさとかそういうものをもっとクローズアップしたほうが、地域がそれぞれの持っているよさとか、そういうものを補完し合うとか、つなげていくとか、認め合うとか、そういう方向のほうがポジティブな気がします。

市長：それは2行目で言えてはいるんですけども、こと教育に関しては、特に保護者は先生に全人格性を求めるし、学校には完璧を求めて、ちょっとでもミスがあると許さないみたいになっちゃうことを、「そうじゃないんだよ」

というふうに言いたいところがあるんですね。クレーマー対策とは少し違うんですけども。

こういう大綱みたいなものにそういう表現が入ることに意義があるのではないかと僕は思っていて、格好つけるのはやめて、格好つけるところは格好つけてもいいんですけども、もっと素で向き合うような関係性ができていて欲しいという思いがあるので、できればここは残したいなと思うんですけども。

「いま必要なこと」だから、名詞で終わる必要があるんですが、「それぞれの不完全さを補完する関係性」とか、「不完全さを緩やかにつながり補完する関係性」とか、そのあたりでどうでしょうか。

柳瀬委員：この③については、私もすごく考えさせられまして、「各主体はその学びの範囲を明確に区切るわけではなく」というふうに後では否定しているんですね。「緩やかにつながりながらお互いを許容し」、結局、③は④を言いたいからではないかと思ったんです。それぞれの問題を共有し、それぞれの立場で全てを協働していくんだということが③から④へ、だから④は大事なんだという形になると思うので、もちろんあえて残すことも大事だと思いますが、④を強調したいなと思いました。

では、③は何が言いたいのかというと、お互いがそれぞれ保護者だけ、地域だけ、学校だけ、行政だけなどということはありませんよ、お互い補完しなきゃだめですよねということを結果的に言いたいわけですよね。家庭教育だけではできないでしょう、学校だけでもできないでしょうということですよ、恐らく。

市長：これももともとは一つだったんですね。分けたのはどういう背景でしたっけ。

事務局：市長おっしゃるとおり、山本先生のお話で、それぞれが不完全なんだよというところ、「アトム保育園」を立ち上げたときに、保護者の御意見も完

様式第1号

全ではないから、共に育てていきましょう、子供だけでなく先生方も育てていきましょうというところで、市長が残したいとおっしゃったのでよかったと思ったんですが、不完全さというところはこういうところで表現していきたいなと思ひまして、④につながるものなんですけれども、先生おっしゃるとおりなんですけれども、③は事務局としては残したいなと思ひております。

柳瀬委員：その辺を強調したほうがいいと思ひますね。③も何が言いたいのかわからなくなっちゃっている。

市長：多分、2文目の存在によってよくわからなくなっちゃったかもしれない。この2文目は、むしろ④に入れるべき話なのかもしれないですね。でも、それは入っているのかもしれないけれども、この辺ちょっと整理し切れてないな。

「保護者は家庭教育において」というのは、「保護者も」というところがあるわけですね。この辺、局長こだわっていたところだったよね。どうですか、この辺の表現は。森田さん。

教育局長：そうですね。今、市長が言ってくださったように、保護者もしっかり子供たちのためにやるべきことはやって、学校も学校でしっかりやるべきことをやって、お互いの役割を担っていくということが、子供をよくすることにつながるだろうというところを強調していきたいなと思ひたわけですね。ですので、ちょっと表現は今考えているところなんですけれども。

市長：それと、最後の「各主体は、区切るわけではなく」となっちゃっているところが、おさまりが悪いのは悪いですね。

教育局長：そうですね。

市長：主体的な役割を担ってはいるが、学べる範囲を明確に区切るわけではないとまで言っちゃっていいのかなどうか。2行目は、完全に落とすか、④にやるかわからないですけれども、「主体的な役割を担いつつ、各主体はその学

びの場を明確に区切るわけではない」と言えば、意味としてこの③の意味が出てくる気がします。で、「緩やかにつながりながらお互いの不完全さを補完し」、不完全さって補完するのかな。「お互いの不完全さを許容し、補完し支え合う関係性を構築する」とか、そういうことかな。

④は、もう少し山本先生の生涯学習とか協働学習的な意味が込められていると思いますね。

小野村委員：おっしゃっていることはよくわかるんですけども、ただ、④の1行目に「学校は」と出てくると、①、②、③と少しずつ広がってきたのが、最後にもう一度「学校は」というふうに戻ってしまって、これが学校だけではなくて、実際にはさまざまな学びの機会が地域にはあると思うので、私もここはどう表現していいか、いい案が浮かばなかったんですが。

市長：おっしゃるとおりですね。ここで学校と入ってきたのは、学校はそういう場所になり得るみたいな、山本先生との話の中で出てきた話かな、そんな感じですか。

事務局：場の一つという意味で入れました。

市長：じゃ、別に学校である必要はない。これを生涯学習の文脈で読み取れば、ここで学校を強調させなくてもいいよね。

事務局：いいと思います。

小野村委員：学校を中心としたというような表現ですよ、ここは。要するにそういうことですよ。学校その他のという。

市長：学校が地域と共有していくことを意識してもらうには、こういう表現があってもいいのかもしれないですけども、ただ、ちょっと他のところと座りが悪い感じはしますね。「学校は」と言わなくてもいいよな。

小野村委員：④の1文目は、これはこれで私はいいと思うんですけども、こうしてしまうと、それだけというイメージが出てしまうので、その協働の場であるとして学校というのはとても大事なんだと。その他にこういう場もあ

るがということで、ここに入れた上で、課題解決のためにそれぞれがというようにはできないでしょうか。ちょっと自分では浮かばないんですが。

例えば交流センターとかそういうものがあるわけで、その他の場でもさまざまな学びが考えられるがということを、うまくこの文と文の間に差し込めればいいかなと思うんですが。

市長：もしそれをするとすれば、さっき③で落とした2行目の「各地区ではそれぞれ何とかの特徴、学びを進める」とか入れて……上の2行目は、入る余地はある気がします。ただ、どっちかという、この……。

倉田委員：この文章はいいんじゃないかなと思うよね。ただ、それをつけ足したほうがいいかなという感じもある。

市長：時間切れになってしまいました。ちょっとここはメールでやらせていただいていいですか、結構一つ踏み切らない感じがするので。あと、その1行目も、ぜひいい案があれば出していただいた上で、メールでまとめて、他の細かい調整等をやらせてもらえれば。

事務局：1行目についてすぐ終わりそうなのでちょっと一言。この教育大綱全体の構成として、今、学校のあり方が最初のほうにあって、その後学びの特徴があって、またその学校の周辺環境の話になって、ちょっと行ったり来たりしているので、大きな章の4番、4ページを今の7ページの前に持ってくると、第3章で教育の柱を示して、次に今の第5章、教育の柱の次が学びの特徴、その次がそれを実現するための学びの場のあり方、それで最後の章に、学びの場の実現に向けていま必要なことと、きれいな流れになるかなと思っています。

今、第4章、4ページの1行目に入っている内容が、実は今の7ページの1行目に入るべき内容だと思っています。4ページにあるのは、「保護者・学校、地域・行政が協力し、社会全体でこどもの育ちを支える」というものなので、本来、4ページは、より学校に寄った一文を入れるべきだったなと思っ

様式第1号

ていまして、そういったものをつくってメールで送らせていただくという形で。

市長：そうしましょう。

教育長：最後に、一番最後の8ページの④のところの出だし、学校へ限定しているところをちょっと和らげるためには、「多様な立場の人が関わることが求められる学校」というようなことを入れてはどうか。そうすると、地域あつての学校ということも含まれるんじゃないか。多様な人たちが関わることが求められている学校というようにすれば。

市長：ありがとうございます。では、一旦それを踏まえて、他の修正点も踏まえたものをメールで送らせていただきますので、その原案を基にコメントをもらうような形で、他の部分これからまた一からやっていると大変だと思うので、他のフィックスされた部分はフィックスさせていただければと思います。並びかえと表現等々について、いつ頃送れるか、送りますので、そういう形でよろしくお願いします。

時間がちょっと延びてしまいましたが、以上です。

事務局：それでは、メールで案を送付させていただき、意見の収集方法などについては別途ご連絡差し上げます。本日はありがとうございました。

以上

令和元年(2019年)10月30日

令和元年度(2019年度)第5回つくば市総合教育会議次第

日時:令和元年(2019年)10月30日(水)

午後1時から午後3時まで

場所:本庁舎5階 庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 内容

教育大綱素案の協議

4 閉会

事務局:総務部総務課

:教育局教育総務課

つくば市教育大綱（本文部分）【ver.5】

つくばの教育が目指すもの

つくばの教育は、一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位目標とする。

一人ひとりが幸せな人生を送るために、違いが受容されそれぞれが持っている多様で豊かな個性が花開く環境をつくる。

その環境において一人ひとりが「善き生の実現能力(capability)⁽¹⁾」と、人と人がつながり、自主的に持続可能なより良い社会をつくるための社会力⁽²⁾を獲得する。

(1) 善き生の実現能力(capability)とは、善き自己実現ができ、幸せな人生を送る力のこと。

(2) 社会力とは、誰とでも良い関係を作る力、より良い社会をつくろうとする意欲、実行力のこと。

つくばで目指す考え方の転換

近代公教育が抱えてきた問題や矛盾に対する転換を宣言する。

「教え」から「学び」への転換

一斉・一方向教育から個別・双方向の学びへ

「管理」から「自己決定」への転換

受動から能動へ

「認知能力⁽³⁾偏重」から「非認知能力⁽⁴⁾の再認識」への転換

偏差値偏重から全人格教育へ

(3) 認知能力とは、「IQ（知能指数）」のように数値化できる能力のこと。

(4) 非認知能力とは、「やる気」、「最後までやり抜く気概」、「リーダーシップ力」、「協調性」などのような数値で測れない能力のこと。

つくばの教育の柱

「問いから始める学び」

知識を教え込むのではなく、自己・他者・社会を探求する学びを目指す。

「自分自身は何者なのか」 自己を知る

強み・弱み・得意・苦手・好きなこと・興味があること・成長したこと（他者との比較した評価ではない）、自分の将来ビジョン、持続可能な世界のために何ができるのか、などを徹底的に問い、自分自身の人生を幸福に生きる自由、つまり自己決定権（人生のオーナーシップ）を手に入れる。

「周りは何者なのか」 他者を知る

どんな人物なのか、得意なことは、苦手なことは、すばらしいところは、などを問いながら、多様な存在と関わり合い、他者の価値を認め、それぞれの強みを活かしながら協働する力を手に入れる。個性、性別、障害、国籍、経済状態などの全ての違いに目を向ける。

「社会をどうやってつくるのか」 社会を知り働きかける

自分はどんなまちに生きているのか、つくばにはどんな魅力があるのか、地球環境からどんな恩恵を受け生きているのか、など自己・他者・自然との関係性によって作り出される環境と社会に目を向け、一人ひとりが幸せに生きるために必要な学び、社会をつくっていくために必要な学びの機会を得る。

つくばが目指す学びの場

保護者・学校・地域・行政が協力し、社会全体で子どもを支え、育てる場所をつくる。

学びたくなる場所

学ぶことは苦痛ではなく楽しいことを体感し、子どもが通いたくなる学校、学びたくなる社会をつくる。日常生活の中で感じたことや疑問、いつもの遊びなどが「学び」につながり、この学びの種が次の学びへの意欲を引き出すことで、学びの循環が生まれる。

子どもが自らつくる場所

大人は子どもの目線に立ち戻り、子どもの発想を認め、大事にする。大人は子どもを管理するのではなく、主体的に問題に取り組むことを常に期待し続ける。

挑戦が称賛される場所

挑戦することで、リスクを負うこと、自分の知っていることと知らないことを明らかにすること、たとえ失敗しても回復し前進することを学ぶ。大人も積極的に挑戦し間違う（大人の無謬⁽⁵⁾性からの脱却）ことから考え学ぶ。このため挑戦や成功を目指しての失敗は周囲から称賛される。安心してリスクを取れる環境の中で挑戦や失敗を繰り返しながら、自ら変化を生み出す経験をすることで自己肯定感⁽⁶⁾を高めていく。

(5) 無謬とは、理論や判断に間違いのないこと。

(6) 自己肯定感とは、そのままの自分を認め受け入れ、自分を尊重し、自己価値を感じて自らの全存在を肯定する感覚。

つくばでの「学び」の特徴

つくばならではの教育を徹底して実行する。

一斉ではなく、個別・双方向の学び

一人ひとりの学びを大切にする。学校では、一斉・一方向授業ではなく、個別・双方向の学びや、クラスや学年の枠にとらわれない異年齢での取組を推進する。学習の進捗状況はもちろん、一人ひとりの個性や特徴、場面に応じて発生する障害や困難さ、外国語での学習環境や経済状態などについても最大限に配慮し、社会全体でその環境に合った学びを実現する。評価は周囲との比較による点数ではなく、本人の成長によって示される。

科学技術や合理的精神を尊重する学び

つくばには科学技術に基づく多くの知的財産と、それを担う人材が集まっている。科学的・合理的精神に基づいた学びは、単なる経験論や精神論を超えて未来を切り開いていくための強力な糧となる。

批判的精神⁽⁷⁾を大切にする学び

物事を論理的に捉え、疑問を持ち、熟慮し、より良い思考へつなげる批判的思考を得る学びを進める。建設的なコンフリクト（衝突・葛藤）を積極的に起こし、対話をしながら合意点を見つけ行動することを学ぶ。こどもも大人も自由で平等な関係の中で批判的思考をすること、問いを投げかけることが奨励される。

(7) 批判的精神とは、目の前の表層的な事象や前提条件にとらわれず、客観的・多面的に分析し本質を問い続ける態度。

実体験を大切に学ぶ

各地の多様な文化と質の高い芸術、自然、蓄積された高度な科学技術などを実体験できることはつくばの大きな特徴である。あらゆる機会で実物や実体験を通して学ぶことにより、対話的・協働的な学びの基礎をつくと共に、学びの中での試行錯誤を促進することで、こどもの好奇心を刺激し、こどもが持っている興味を掘り下げ、創造性と革新性の獲得を目指す。

遊びによる非認知能力を獲得する学び

「遊び」の価値を再認識し、異年齢グループでの遊びを推進することで、挑戦する、やり抜く、自分で考えて動く、責任を持つ、リードする、ルールを作る、ルールを変える、教える、一人ひとりがより楽しめるようにする、などの創造的学びを得られる機会をつくる。

持続可能な社会への視座を獲得する学び

短期的な経済合理性や産業社会発展のための知識獲得・能力開発ではなく、地球環境や人口問題・格差貧困問題など人類共通の課題に触れ、持続可能な社会とより良い世界をつくるために必要な感性や視点、技術に関する学びを進める。

つくばの「学び」実現に向け、いま必要なこと

Oneteam として、つくばでの新しい教育を実践する。

問い続け、学び続ける教師への支援

教師の役割は教え込みを中心とするティーチングから、問いを投げかけ主体性を引き出すコーチングへとシフトする。自分（教師）は学校を楽しんでいるかこどもの学びを支援することを楽しんでいるかこどもたちは学校や授業を楽しんでいるかその子に合った学びができているかこどもたちの成長のため、一人ひとりが考える場をつくるにはどうすれば良いかと絶えず問い続けることができる教師への成長を促し、そのための自主的学習を支援する。

教師がこどもと向き合う時間を増やすための、学ぶ環境の整備

多忙を極める教師の働き方改革を徹底的に進める。教師と学校の自由裁量⁽⁸⁾度を拡大することで、教師が直接こどもと向き合う時間を増やす。個別ニーズに合った学習やプロジェクト学習⁽⁹⁾を進める上で必要な ICT 環境（機器）は積極的・効果的に導入する。

(8) 自由裁量とは、判断の基礎となるさまざまな材料について、他からの指図や拘束を受けず、自由に選択し考量すること。

(9) プロジェクト学習とは、学習者がチームを組み、自分たちで課題を設定し解決していく学習法のこと。

保護者・地域・学校・行政がそれぞれを許容した、緩やかなつながり

保護者は家庭教育において、地域は人と社会の間での学びにおいて、学校は学校教育において、また行政は公教育の整備において主体的な役割を担っている。中心部や沿線開発地区、周辺地区ではそれぞれ人材・環境・資源・歴史・文化などの特長を生かした学びを進める。各主体はその学びの範囲を明確に区切るわけではなく、緩やかにつながりながらお互いを許容し、補完し支え合う関係が必要であることを再認識する。

保護者・地域・学校・行政の対話と協働の推進

多様な立場の人が関わる学校は、それぞれの悩みや課題を共有し解決するための対話と協働の場である。課題解決のためにそれぞれが参画し協働することで、一人ひとりの社会力が高まり、互いの信頼が生まれ、濃密な人間関係が醸成され、互恵的で包摂された地域の形成を目指す。